

告別式の平準化と作法書

山田慎也

Standardization of Farewell Ceremonies for the Deceased and the Books of Funeral Etiquette

YAMADA Shin'ya

はじめに

- ① 告別式の成立
- ② 戦前の作法書
- ③ 戦後の作法書
- ④ 地方別の作法書の成立
- ⑤ 告別式とその位置づけ
おわりに

【論文要旨】

本稿は、近代以降、葬儀において告別式が中心的な儀礼として成立し、次第に地方に普及して行く様相を、作法書と葬儀記録などの関連資料を通して分析し、民俗儀礼の平準化とそれを取り巻く言説を考察することを目的としている。近代の葬制は、葬列を行い自宅と寺院、墓地などでそれぞれ儀礼を行うなど、いくつもの儀礼の連続であった。しかし、葬列が無駄なものとして認識され、都市構造の発達によって実施が困難になる中で、誕生したのが告別式であった。ただし告別式の濫觴とされる中江兆民の儀礼は、宗教儀礼を否定し葬儀の代替として行われたが、その後の告別式は焼香などの葬儀の会葬部分を分離したものに变化していった。当時は基本的に葬儀式と会葬部分の告別式は分離されていたが、昭和期の作法書では、総体として新たな形式としており、またかならずしもその認識は一樣ではなかった。

戦後になると、この分離形式が正統な方式として認識される一方で、次第に一体化して行われるようになった。そして葬儀を含めて告別式を中心として捉えるようになる。一方で、都道府県別の作法書が一九八〇年代以降登場すると、告別式の記述はほぼ同一であるとともに、東京を正統な方式とし、現地では一体化したものが実施されているという、地方差として認識されるようになり、結果としてほぼ全国的に均質化した状況が呈されるようになる。ただし、地域によってはもっと多様な状況を示しているが、作法書という支配的言説によって儀礼のありようが収斂化していることが明らかになった。

【キーワード】 告別式、作法書、近代化、葬儀、儀礼

はじめに

日本の葬送儀礼の大きな特徴は、明治後期に東京において成立した告別式が、次第に中心的儀礼となって全国に広まっていくとともに、告別式を行う空間として祭壇を飾りつけ、告別式以外の一連の儀礼もそこで行われるようになっていくことである。その空間は、昭和初期に次第に喪家自宅に設営されるようになり、しばらくはその時代が続いたが、一九九〇年代頃から全国的に専門葬儀場に移行するようになると、この空間がきわめて重視されるようになっていく。一方で、二〇〇〇年頃から、それらの儀礼を一切行わず、火葬のみを行う「直葬」も増加しつつある〔山田 二〇〇四 七八―八〇〕。

告別式の成立については、先学がすでに取り上げている。葬儀の近代化のなかでいち早く告別式の重要性を指摘したのは井上章一であった。井上は、霊柩車の意匠を通して葬儀の近代化を分析しているが、トピックス的に告別式の成立を作法書の記述を素材として考察し、昭和初期に浸透していったことを指摘している〔井上 一九八四 一六〇―一六五〕。そして告別式の濫觴として位置づけられたのが、思想家である中江兆民の死に際して行われた儀礼であり、中江の死生観と告別式執行の背景について、村上興匡が分析を試み、宗教儀礼の代替として自己の生の最終表現と遺族との妥協の産物として、告別式が生まれたことを明らかにしている〔村上 二〇〇一〕。

ただし、告別式が普及する際には、中江兆民の死去の際に行われたような当初の形態ではなく、その形が大きく変容することで、従来の葬列に変わる新たな葬儀のやり方として東京などの都市部を中心に広まっていった点については、従来、あまり注目されてこなかった。ここでは会葬行為としての焼香や玉串奉奠を中心とした儀礼であり、そこに従来の

読経、引導などの儀礼が付随する形で行われていったことが判明した〔山田 二〇一三 一四六―一四九〕。そして、地方においても告別式が浸透していく中で、地域の実情にあわせて受容されていった様相については以前検討を行っている〔山田 二〇一三 一五四―一五六〕。

しかし、国内において告別式がどのように受容されているのか、またその全容については明確にはなっていない。そこで、本稿では、かつて井上章一が告別式の成立を作法書を通して行ったように、地域別の冠婚葬祭の作法書における告別式の記述をおさえるなかで、地方における告別式の認識のあり方を析出していきたい。井上も指摘するように、冠婚葬祭の作法書の記述は概して保守的であり、新風俗を直ちにとりいれることはあまりない。新風俗が定着して生活の中に根付いたとき、はじめこれを掲載するという〔井上 一九八四 一六一〕。こうした点で、冠婚葬祭の作法書はほぼ定着している慣習として内容が期待される一方、必ずしも、実際の葬儀の様態と同一ではない可能性もはらんでいる。しかしその場合、記述はそれを正統とするテキストとして、「正しい」方式として捉えられることが多く、その方向へ収斂し、また依拠するようになる。つまりこれらの記述は、人々の認識傾向を明らかにすることができ、大まかにはその方向に移行するものとして把握することが可能である。

さらに、地方別の冠婚葬祭の作法書の存在は、情報発信の中心である東京を中心とした作法書ではそれぞれの地域にはそぐわないという認識を背景として刊行されている。これはおもに一九八〇年代になって盛んに刊行されており、地方別の実態を把握することで、地域における儀礼の認識を捉えることも可能と思われる。

そこで、まず告別式の成立とその様態を押えた上で、地域差を意識していない東京中心の作法書における告別式を捉え、さらに地方別の告別式の認識のあり方を把握していきたい。

①告別式の成立

近代に告別式が成立するには、従来の葬送儀礼が肥大化し負担感が増してそれを無駄と捉えられるようになったことが背景にある。従来の葬儀は、葬列を中心とした葬儀であり、すでに一七世紀末より、龕師、龕屋、乗物屋といわれる葬具業者が誕生し、棺や輿、駕籠などを調達して、葬列を行うことが重要であった〔木下 二〇一〇 二二八―二三〇〕。

さらに近代になると従来の身分的規制がなくなること、葬列の肥大化がより進展していき〔平出 一九七二（一九〇二）一〇〕、中産の家が一両年に二親の葬儀を出すと身代が傾くとまでいわれるようになる〔野口 一八九八 一〕。その状況については、近代の葬送儀礼の先行研究の蓄積があり〔井上 一九八四、村上 一九九〇など〕、さらに東京の肥大した葬列の具体的な様態も明らかになっている〔山田 二〇一五〕。

このような葬列の肥大化に対して、路面電車や自動車などの交通機関の発達、地域の拡大など都市化の進展によって、その実施が次第に困難になっていく。さらに葬列を無駄なものであるとの意識が高まってくることで、次第に葬列の廃止が生起するようになり、そのなかで告別式が成立し、大正期から昭和初期に掛けて次第に人々に浸透していったことが背景として指摘されている〔井上 一九八四 一六〇―一六五、村上 一九九〇 四七―四九〕。

もう一方は、告別式の成立の思想的背景として、近代合理主義的発想により従来の葬儀の否定がなされたことである。それは中江兆民が「無神無靈魂」を唱えた唯物論者であり〔中江 一九八三（一九〇二）〕、宗教による葬儀を否定し、火葬のみ行うことを遺言していた。しかし、それで終えることができない遺族や友人たちの手によって、仏教や神道などの既存宗教の色彩のない告別式を考案して行ったのである〔村上 二〇

〇一九〕。一九〇一（明治三四）年二月一日付『朝日新聞』や『読売新聞』では、「遺言に依り一切の宗教上の儀式を用いず候付（中略）青山会葬場に於て知己友人相会し告別式執行致候」と、宗教儀礼を行わず、「告別式」を行う旨が告知されている。

中江の死去の際に行われた告別式の形態は、従来の仏式葬儀から仏教的要素を排除したものであった。当時は自宅で通夜を行った後、葬儀当日は自宅から葬列をして葬儀式場に向かうが、その際に仏教的な輿や蓮華の造花などを伴わず、名前を書いた銘旗と棺を運ぶための車である棺車の後ろに参列者が連なる簡素なものであった。さらに葬儀式場は、寺院ではなく青山会葬場（青山斎場）であり、読経の代わりに追悼演説、弔詞（弔辞）、弔詩、弔歌などであり、焼香の代わりに棺前告別と称して棺の前で敬礼が行われた〔幸徳 一九〇二 一〇〇〕。つまり当時の葬儀の過程に従って、そのなかで仏教的と思われるものを排除して代替のものを行ったのである。そして弔詞など死者への告別と追悼が中心であり、葬儀の代替儀礼として現在のいわゆる無宗教お別れ会に近いものであった。

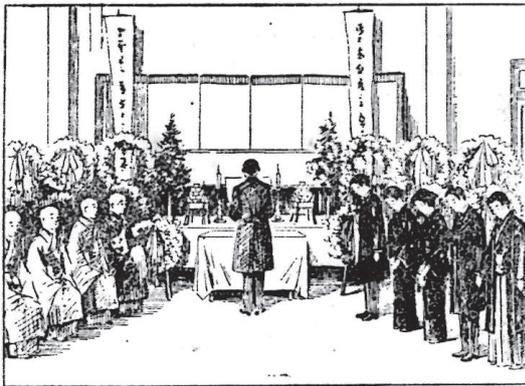
ただし、当時としてはかなり珍しい儀礼であったため、当時の新聞では「一代の奇人は前古無比の奇式に依りて茲に無神無靈魂説の実行をなし訖はんぬ」（『東京朝日新聞』一九〇一年二月一日付）とあり、つまり「当代の奇人は前代未聞の奇妙な式をして、無神無靈魂説を実行した」と報じていたのであった。

その後、確かに告別式は次第に行われていくようになるのではあるが、このような無宗教の葬儀の代替儀礼としての告別式が広まったのではない。のちに「仏式告別式」、「神式告別式」と称する告別式が一般に浸透していった〔山田 二〇一三 一四四―一四九〕。ただ、当時の告別式がどのような認識であったのかについては、あまり明らかにはなっていないのである。

② 戦前の作法書

前記のような明治末期から大正期に成立した告別式について、井上章一も指摘するように、作法書においては昭和期になって初めて言及されるようになる(井上 一九八四 一六一)。一九二七(昭和二)年刊行の甫守謹吾『現代の作法』では、「現在は都会地に於ては葬式に代へるに告別式を以てすることが多いのでございます。」とあり(甫守 一九二七 二七二)、葬儀に代わるものとして告別式があり、都市における流行となつて指摘していることを指摘している。従来の葬儀に代わるものこの記述から把握することができる。

さらに告別式の挿絵が載っており、ここでは正面背後に屏風が立てられその前に棺が安置され、棺前にある白布を掛けた机の上には燭台や打菓子が並べられている様子が描かれている。その祭壇に向かって左側には僧侶が座っており、右側には遺族が立って並んでいる。



告別式の図

図1 告別式の図(『現代の作法』p.271より転載)

その前でフロックコートの男性が弔辞らしきものを読んでいる図である(図1)。祭壇前には椅子が無く、祭壇前で焼香をする形態である。

さらに告別式の内容については、浄土宗僧侶と考えられる須賀隆賢執筆の『引導下炬集』に詳しい。これは引導法語が集成された著書であるが、付録として「葬儀規範」

が掲載されている。この『引導下炬集』は一九一六(大正五)年に初版が発行されているが、この初版には告別式についての記述がない。この書籍は七版を重ねるが、関東大震災によって紙型が消失し、一九二四(大正一三)年に改訂第八版が上梓され、さらに一九三一(昭和六)年に増補九版が発行されている。筆者は増補九版を架蔵しており、告別式の記述については、付録の「葬儀規範」第一四章(四)にある。初版本では、(一)から(三)までの三項目のみであり、増補第九版では、(一)から(三)までは初版と同じで、(四)以降が加わって、告別式の状況が述べられている。

(四) 告別式、近來寺院又は自宅にて告別式をなすこと流行し葬儀の一新形式となれり、かゝる形式の生れし所以は全く近代生活の繁多なるが為に会葬者に無益の時間を浪費せしめざる喪主の意樂より出でしものならんも、又一面には古き形式の無意義に倦きたる近代人の要求に基づけるものなるべく教家の三思すべき現象と云ふべし、宜しく之を善導して時代に適切なる新様式を工夫すべし(須賀一九三一 三四)。

寺院や自宅において告別式を行うのが流行し、告別式が葬儀のひとつの新形式となつていると指摘している。その背景として近代生活が多忙となり、会葬者に無益な時間を浪費させないための喪主の配慮であるとともに、古い形式にその意義を見いだせず飽きられている点もあることから、宗教者が熟考すべきことと指摘しており、時代に合わせた新様式を工夫すべきものと須賀は述べている。葬列を中心とした従前の葬儀は、自宅出棺から同行して参列する形式のため、葬儀参列の時間が長くなるだけでなく、いつになったら終了するのかわからずつきりしないことが問題であった。よって生活改善運動においても葬儀は時間厳守の励行が課題

とされていたのである。

さらに、大きく二つの式場の相違があった。

(イ) 寺院にて告別式を挙行する場合は先づ喪主親戚のみにて通途の葬儀式を執り行ひ然る後一時間乃至二時間ほどの間に随意焼香せしむべし、此際喪主は式場の喪主席に着座（或は起立）し焼香を終りて退出する会葬者に挨拶をなすべし、随意焼香中仏前にて極めて静かに念仏又は誦経するも可なり〔須賀 一九三一 三四〕。

これは寺院における告別式についての方式である。まず葬儀式を先に行い、その後で焼香を随時に行う時間を設ける形式である。喪主は会葬者に挨拶をするように、祭壇ではなく会葬者側を向くようにし、僧侶も座を脇に変える。一方、自宅の告別式では以下のようになる。

(ロ) 自宅にて告別式をなす場合は棺をば大広間、座敷、又は故人の日常起臥せし居室に安置し香華灯明等適宜に供養し、喪主は棺側若しくは次室にありて焼香者に挨拶をなすべし、此間役僧を棺側に侍せしめ、誦経念仏せしむるも可なり、随意焼香終了後出棺の用意をなし、第七章に規定せる葬儀式によりて之を送るべし、筆者曾て或商家にて告別式を行ふに当り、会葬者をして店頭より下足のま、焼香せしめつゝあるを見たることあり、会葬者の便利を考慮しての工夫なりしならんも非礼の甚だしきものなり。会葬者の厚意を軽んじ、故人に対するの礼を失するものと謂うべし、かゝる場合は力めて静肅、丁重、敬虔に當むべし。然らずば却つて悪風陋習を創始する惧れあり、注意せざるべからず〔須賀 一九三一 三四―三五〕。

ここでは先に一般の参列者の随時焼香を先に受けつけ、その後で葬儀

式を行い、出棺の順番となっており、この場合寺院での告別式とは葬儀、随時焼香と順番が逆になっている。そして自宅での告別式では、会葬者を家の中に招き入れるときに、靴を履いたまま焼香することに對し、会葬者への便利を配慮したものはあるが、むしろ故人と会葬者に對して失礼なこととしている。

もつとも須賀が葬儀式といっているのは、自宅以外でおこなわれる葬送儀礼の中心的儀礼であり、引導式もしくは下炬式などを指している。そして自宅での儀礼は内誦経、自宅以外でおこなわれるこれらの中心的儀礼は外誦経ともいわれるものである。

通常、仏式葬儀は、故人が剃髪受戒をして出家をし、導師の引導、下炬作法によつて仏として位置づけられ他界に送られるという儀礼構造であり、この引導作法や下炬式が、葬儀のもつとも重要な儀礼となり、従来は寺院や墓地などで行われた。浄土真宗のように引導作法が教義上ない宗派もあるが、それに代わる寺院や墓地での勤行はあった。

須賀は、葬儀は堂内式、露地式、三昧式の三種類があると述べている。堂内式とは寺院の本堂で行うものであり、露地式は葬儀の最も原始的なもので、広野、山間、林中などで式を行うもの、三昧式は火葬場または墓地で行うものである〔須賀 一九三一 一六一―一七〕。これは告別式成立以前から行われていたものであり、従来の須賀の言う「葬儀式」をどこに位置づけるかが、自宅と葬儀場と異なっていた。

さらに国民儀礼普及会編『現代礼儀作法全書』（国民礼儀普及会編 一九四〇）では、仏式の葬儀の後に、第五節「現代式の簡略な葬儀」として告別式について言及している。

最近の傾向として会葬者の手数と時間を省き、且つ葬儀費用を節減することが流行してゐる。

即ち途中行列を廃して、一般会葬者は式場に集まり、喪主及び近



告 別 式

図2 告別式(『現代礼儀作法全書』p.193より転載)

親の者は、棺を柩車(馬車、自動車)に乗せて先頭とし、自分たちもまた自動車、俵などでこれに付き随ひ、一直線に式場に向ひ、直ちに式に移るのである。またさらに簡略して、入棺式後その棺前において一般会葬者の告別式をも行ひ、途中行列を廃し、棺は直ちに霊柩自動車にて火葬場に送り、こゝで茶毘に附して骨上式を行ひ、肉親縁者のみにて墓所に埋葬することも次第に行われるやうになつた(『国民礼儀普及会編 一九四〇 一九三―一九四』)。

やはり会葬者の時間的な効率性や経済性からさまざまな葬儀の簡略化が起こっていることが指摘されている。まず葬列が廃止され、霊柩車と自動車等による移動に代わつたことを述べ、その後通常の葬儀となる。これは従来の葬儀で葬列を廃止したものであつた。その後が、自宅告別式である。これは、自宅で納棺式のと、そのまま告別式を行うものとして行つてゐる。従来の葬儀に代わつて自宅告別式を行うため、葬列はもろろ

んなく、火葬、埋葬となつてゐる。

つまり上記、甬守謹吾

『現代の作法』、須賀隆賢

『引導下炬集』、国民礼儀

普及会編『現代礼儀作法

全書』の三つの記述とも、

葬儀の代替として、新た

な方式として告別式が認

識されていることがわか

る。

また主婦の友社編の

『家庭作法宝典』(主婦の

友社編 一九四〇 二九五―二九六)では、場所の設定から説明が始まる。

葬儀と告別式

▲告別式を行ふ場所の選び方

葬儀は死者に対する人としての最終の礼儀でありますから、最も鄭重に、最も厳粛に行はなければなりません。

今日、都会地では多く告別式の語が用ひられますから、以下告別式の順序を申上げることになります。この死者との最後のお別れである告別式を、自宅で行ふか、お寺やその他の斎場で行ふかは、家の事情や弔問者の便利等を考へて、その家族と親族間にて決定いたしますが、いずれにしても各係をおき、手順を定めて混雑を避け、時間を節約することが大切であります。

先ず告別式の場を自宅かもしくは寺院や斎場とするかに選択肢が分かれるが、いずれも時間などの効率を考へることが重要であつた。基本的には自宅で行うことが最も利便的であることは次の文からうかがえる。

▲自宅で行ふ場合とその他の場合

告別式は自宅で行ふことができれば、最も利便的ですが、これが不便の場合は、お寺で行ふのが通例であります。都会地では、例えば東京では青山斎場や谷中斎場のやうな、公共の斎場で行ふこともあります。

自宅で告別式を行ふ場合には、弔問者の混雑を避ける上から、なるべく庭に向いた座敷で行ひ、玄関に受附をおき、弔問者を座敷に通して、告別を済ませたものは、入つて来たのとは別の方から出るやうにすれば、混雑が避けられて便利です。

自宅で告別式を挙げるには場所が狭いとか、その他不便の場合は、

お寺か斎場で執行します。この場合も、混雑を避け、静粛に鄭重に行ふことは申すまでもありません。

自宅告別式が最も便利であり、弔問者の導線を確保するために、庭に面して祭壇を設営し、入口と出口を分けるよう指導している。そして次に遺族の並び方と式次第である。

▲告別式を挙げる方法

告別式を挙げるには、霊柩を正面に安置します。自宅やお寺では、家族や親族は霊柩車(マム)に向かつて右側に並び、友人その他の人々は左側に並びますが、斎場で行ふ場合にはこれとは反対に並ぶのです。

告別式はお坊様の読経があり、家族及び親族の礼拝があつてから、一般弔問者の告別に移ります。多くの場合は混雑を避ける上から、一般の告別式よりも、一時間か一時間半くらゐ先に、家族及び親類の者の告別式を済ませておく方が便利です。

告別式に参列する場合は、霊前に焼香して礼拝をいたします。その順序は予め定めておくべきもので、途中に飛入をして順序を紊ることがあつてはなりません。弔電や弔辞は、身内のもの、告別するときに朗読するのが通例ですが、必ずしも一定したものではありません。せんから、係員で適宜に予め定めておくことです。

ここで式次第があるが、告別式を二つの意味で捉えている。それは総体としての告別式で、お坊様の読経、家族及び親族の礼拝、一般弔問者の告別をふくめたものであり、葬儀の代替式ともいえる。一方で個々の儀礼も告別式と称しており、家族親族のもの告別式、一般弔問者の告別式ともいっているのである。とくに僧侶の読経だけではなく、弔電、弔辞も「身内のもの告別するとき」に朗読するのが通例といっている

のは、従来の葬送儀礼の引導式に該当するものと思われる。

じつは当時の葬送儀礼においても、実際には告別式の使い方は多様であり、時には葬儀の過程のなかで何度も告別式を行っている場合もある。例えば、内務官僚で犬養内閣においては司法大臣を務めた川村竹治は、一九二〇（大正九）年九月二三日に父を亡くした。その際には内務省警保局長であり、神式の自宅告別式となった。その葬儀記録『敬弔記』によれば、九月二五日の午前一〇時より「告別祭」があり、これは親族参列のもので、正午より午後二時までが「一般告別式」になっている。一〇時からの儀礼は、神葬祭ゆえ告別祭となっているが、その内容は個人の経歴が含まれた祭詞を読み上げるなど、一連の儀礼の中で最も中心的な儀礼となっている。さらに一般告別式は分離され、喪主および主な親族二名が参列とあり、会葬者への対応の人と考えられる。「告別祭」は、通常の神葬祭であれば、「葬場祭」に該当する儀礼であるが、「告別祭」と称しているのは、自宅での式であるため、葬場祭とするわけにはいかず、告別という用語を使用したものと考えられ、その後の一般告別式とは別個の儀礼として執行されている。

葬儀の過程で告別式を何度も行っている事例は外務官僚であった室田義文の葬儀である。室田義文は、一九三八（昭和一三）年九月五日に小田原の自宅にて亡くなった。室田の葬儀写真アルバム『薫香』の中で、室内に張られた式次第によると、五日当日に「枕経」、「納棺」、翌六日には「通夜」を午後一〇時まで、また七日は「本通夜」が午後一時まで行われた。八日は、「棺前読経」午前七時、「告別式」を午前七時半より八時まで自宅において行っている。午前八時出棺であり小田原から東京の旧鹿鳴館まで霊柩車で移動する。「本葬」は、鹿鳴館において一二時半より一時半まで行われ、その後「告別式」を午後二時から三時まで行い、鹿鳴館を博善社の落合火葬場にむけて出棺し、午後三時半火葬場に到着、四時より火葬となっている。午後六時半そのまま谷中墓地にむ

かつて納骨となる日程であった。東京旧鹿鳴館で行われたのは葬儀と告別式であったが、小田原の本邸でも出棺前の棺前読経のあと、告別式を行っている。つまり、現在のように、告別式は一回だけではなく、何度も行っている場合もあり、また葬儀に当たる部分を告別式と称する場合もあったり、告別式は新たな流行として、当時は多様な認識があったことが、以上のことからわかるのであった。

こうして、戦前期を通してみると、当初中江兆民の葬儀の際に行われた告別式は、従来の葬送儀礼の代替として宗教的と思える要素を排除したものであった。しかし、その後仏式告別式など、従来の中心儀礼である引導下炬式などを含みこみ、告別焼香などを組み込んだ総体としての告別式になっていった。しかし、まだ告別式として安定しない部分もあり、告別焼香部分を告別式と称する場合もあり、その認識は多様であるが、こうした発想は戦後の告別式の認識に引き継がれていく。

③戦後の作法書

戦後もさまざまな作法書が刊行されることになるが、全国的に最も影響を与えたのが塩月八重子による『冠婚葬祭入門』である。これは一九七〇年に初版が出版された後、『続冠婚葬祭入門』、『図解冠婚葬祭』、『続々冠婚葬祭』とシリーズで刊行され大ベストセラーとなり、累計七〇〇万部ともいわれ、それ以降も塩月八重子はさまざまな作法書を出版していった。

こうした点でこの作法書は全国レベルで普及した本といえよう。その『冠婚葬祭入門』の中で、二二二「葬儀の日どりは友引を避けたほうがよい」では「塩月 一九

七〇 一三七」

さて、通夜が終わると、近親者による葬儀と、一般の人の弔問を受ける告別式の準備にとりかかります。昔は、葬儀と告別式を別個に考えていましたが、現在は、ほとんど、葬儀からそのまま告別式に移る場合が多いようです。

とあり、葬儀と告別式が連続していることが述べられている。

しかし、このシリーズとして翌年刊行された『図解冠婚葬祭』のなかで、一三五「葬儀の席次」では、会社役員をしている男性が亡くなった設定での葬儀の挿絵がある。それは斎場を借りた仏式の葬儀の設定で、祭壇前に遺族や会社関係者が並んでいる図があり、祭壇に向かって中央より右側が遺族親族、左側が会社関係や故人の友人知人が描かれている（塩月 一九七一 一七六―一七七）（図3）。つまり通常の葬儀の設定での挿絵である。

図3 葬儀の席次（『図解冠婚葬祭』pp.176-177より転載）

図4 告別式（『図解冠婚葬祭』p.181より転載）

さらに一三八「仏式の葬儀・告別式」では、「葬儀は故人の霊をなくさめ、つつがなく成仏することを祈る儀式です」とあり、①僧侶の読経、②弔辞、③弔電の披露、④僧侶の焼香と参列者の焼香、⑤お礼の言葉として葬儀が終わるとしている〔塩月 一九七一 一八〇―一八一〕。さらに

「告別式は文字どおり故人との最後の別れを告げる式です。僧侶は正面の座をはずして読経し、遺族たち葬儀に関係した人は、一般会葬者のほうへ向いて一列に並びます。これは、会葬者の厚意に黙礼して答えるためです。僧侶の読経のうちに、会葬者の焼香が終わわり、僧侶が退場したところで告別式が終了です。

この葬儀と告別式はいっしょに行われますが、葬儀には親族とごく親しい間柄の人が参加し、告別式は一般会葬者が参列するのがきまりです。そのため、葬儀の開始時刻と告別式の開始時刻をはっきりさせておきます。ほとんどの場合、葬儀と告別式とは一時間ほどの差をおくようです。」

と、葬儀と告別式の儀礼の目的の相違を述べ、儀礼は連続はしていても、葬儀と告別式は独立した儀礼としている。そして葬儀では、みな祭壇に向かって正面を向いて座っているのに対し、告別式は僧侶も正面をはずし、遺族関係者は一般会葬者に向かって一列に並んでいる(図4)。一応分離しているものの、告別式は葬儀との連続体になったわけであり、さらに一九八〇年刊行の千登三子監修『冠婚葬祭』②葬儀と供養では以下のように述べている〔千監修 一九八〇 一二三〕。

現在の葬儀は、告別式が方式といわれるくらい、告別式の色濃い葬儀になっています。また、葬儀と告別式は連続して行われ、しかも一般会葬者が多いため、葬儀といえば会葬者の焼香を思い浮かべ

るほどです。

しかし葬儀と告別式は本来は全く別々の意味を持つものなのです。葬儀は死者を弔う儀式であり、告別式は死者に最後の別れを告げる儀式です。葬儀は遺族、近親者、故人とごく親しかった友人、知人で営まれ、告別式はそれに一般の知人も参列するわけです。

会葬者の人数や規模によってちがいますが、ふつう葬儀と告別式にそれぞれ三十分〜一時間を予定します。

と、一応葬儀と告別式について、別の意味を持つ異なる儀礼と述べているが、それでも現在の葬儀のことを「告別式方式」といわれる程、葬儀のなかの告別式の比重の大きさを述べており、告別式が浸透し、葬儀よりも中心的儀礼としての位置づけの大きさを、その記述から見ることができる。

④ 地方別の作法書の成立

① 作法書の動機と執筆者

このように一九七〇年代には、基本的には作法書は地域差を意識したものは登場しておらず、東京や近畿といった大都市を中心とした記述になっていた。そのなかで、次第に地方別の作法書が登場するようになる。地方別といっても、市町村やさらに細かな地域のものはありません。多くの場合、都道府県別の作法書が一九八〇年代になると次第に刊行されるようになる。それは地域ごとの差異が反映されていないことに対する要求であった。

たとえば、『京都・宇治・城陽地方の儀式作法入門』〔岩上 一九八六〕では、

核家族化が定着したためでございますか、冠婚葬祭に関する書籍が数多く出版され、書店の書棚を賑わしております。しかしながら、そのほとんどが東京の出版会社で編纂されたもので、一部、関西式として説明されておりますものも、大阪式の記述が多く、当地方の儀式作法・しきたりとは異なります。「書籍に書かれている通りに行い恥をかいた」と言ったことを再三承り、儀式作法研究にたずさわっている者の一人として、大変憂慮いたしておりました(岩上 一九八六 一〇)。

と東京はもちろんのこと、関西式といっても大阪の作法であり、京都については述べられていないだけでなく、東京などの作法書通りに行つて恥をかいたという意見も聞いていることを述べて、京都・宇治・城陽地方の作法書を書いた動機と述べている。

また大分の葬祭業者が編集した『豊の国お葬式のマナー』(金澤 一九九二)では、

「お葬式のことを知っておきたいと思つて、冠婚葬祭の本を読んでみたが、東京や関西の風習ばかり書かれていて、何となく実感がわかない」という声にこたえて、弊社が別大地域の風習を中心に書いた(後略)(金澤 一九九二 表紙裏)。

といい、やはり、東京や関西といった中央の作法書しかないことに対する不満が述べられている。

一方『兵庫の冠婚葬祭』あとがきでは、

「冠婚葬祭」の類書は東京発信のものが多く出ている。全国新聞

社出版協議会の例会の席上で、各地方の特色を盛った冠婚葬祭の出版の紹介がなされ好評を博しているとの報告を聞いた。考えてみれば兵庫県ではこの種のものも刊行されていない。それは当然のことながら、小社が手を染めていないからである。そこで遅ればせながら刊行に着手したが、なかなかの難物であった。山陽新聞社出版局の助言を受けながら、何とか特色を出したいと願いどうにか刊行までこぎつけたのがこの本です(神戸新聞総合出版センター 一九九二 二二四)。

とあり、東京中心の作法書に対する不満が各地の冠婚葬祭作法書を次々と出されていることを示し、さらにこうした著書が地方新聞社によって刊行されていることも述べている。さらに『ぐんまの葬祭』(上毛新聞社出版局編 二〇〇〇)では、

東京の出版社から冠婚葬祭のマナー本は数多く出版され、特に近年、葬祭に関してのものがよく目につきます。これらにはあくまで東京を標準としてつくられており、群馬県内の風習・しきたりには必ずしも合致していないものも多く見受けられます。群馬でつくる群馬の葬祭の本があってもいいのではないか、そんな気持ちから「ぐんまの葬祭」の企画がうまれました。

やはり東京標準として群馬の地域に合致していないものに対する不満から地域の作法書が必要とされている。そして、もつとも本土と異なる沖縄もその差異を認識したことが刊行の動機であった。『沖縄冠婚葬祭の手引』(那覇出版社編集部編 一九八二 三一四)によると、

最近、本土からさまざまな冠婚葬祭についての手引き書が刊行さ

れ、沖縄の書店の店頭を飾っていますが、それらを手にして、さて現実に使ってみる段になると、違和感を覚える方が多いかと思えます。(中略) 沖縄での冠婚葬祭のしきたりは、本土とはずいぶん違います。(中略) その基本を読みとってほしいと思います。

これは東京や関西と言うよりも本土との相違の中で作られているのである。こうした地方差の意識が、一九八〇年代になって誕生しており、それぞれの作法書が誕生するようになる。

これらの作法書の執筆者もしくは発行者は、その性格を大きく三つに分けることができる。第一は、僧侶などの宗教者による執筆である。第二は葬祭業者や結納業者、デパートの消費相談員などの儀礼に携わる業者によるものである。第三が各地の地方新聞社であり、これが最も多い。

第一の宗教者によるものは、比較的早い段階で出版されていたものが多い。例えば『沖縄冠婚葬祭の手引き』は一九八二年であるが次に地方別で早く刊行されたのが、一九八五年の『信州の仏事』である。これは信州仏教研究会編となっており、有志の僧侶による編集である。八〇年代はこのような形態がある程度見られ、このほかにも、同年に『秋田の仏事』(一九八五)があり、これは大坂高昭という曹洞宗僧侶一人によるものであり、さらに一九八六年の『岩手の仏事』では、編集委員の一人は、岩手県は曹洞宗の寺院が多いため、曹洞宗僧侶が多い。

第二は儀礼に携わる業者である。一九八六年の『京都・宇治・城陽地方の儀式作法入門』の執筆者岩上力は、結納品を扱う会社の役員であり、儀式作法研究会を主催している。結婚に関わる業務の一環である。『豊の国お葬式マナー』は一九八八年に初版を一九九二年に改訂版となるが、これは中央葬儀という葬儀社が発行している。また『名古屋版おつきあい講座』(一九九五)では、出版は中日新聞本社であるが、執筆者の竹

内くに子は、もと県消費生活センターの名古屋通産局の県消費生活センター消費生活相談員や松坂屋暮らしのアドバイザーを二五年間続けた人物であり、中日新聞でもマナーの連載をしていた。

第三が最も多く各地方新聞社によるものである。これはむしろ第一、第二の執筆者による著書より遅れて一九九〇年代以降盛んに刊行されているが、現在でも後続の版が続いているものも多い。新聞社の場合、新聞での連載を再編集して冠婚葬祭の作法書にしていく場合もある。

北海道新聞社の『北海道の冠婚葬祭』(一九八八)では、北海道新聞社生活部が冠婚葬祭に関わる記事の連載をしており、それを再編集している。そのため取材先のコメントもそのまま掲載されている部分も多く、冠婚葬祭をくまなく載せているわけではない。さらに石川県の北陸新聞社『北陸の冠婚葬祭』(一九九〇)もやはり記事の連載をベースにしている。これらの連載をベースとしたものは、通常の冠婚葬祭マニュアルにある項目が揃っていない場合もある。それに対して、その後の多くの新聞社による冠婚葬祭作法書は、各項目をそろえており、相互に参照文献としてあげているものも多々みられる。それが全国新聞社出版協議会の例会の席でも各地のこれらの作法書が話題になるほどであり(神戸新聞総合出版センター 一九九二 二三四)、各地で刊行されていった。そして完全にマニュアルとしての用途を意図しているものである。

ちなみに民俗学者が執筆した連載を単行本化した『島根の冠婚葬祭』(白石・酒井 二〇〇〇)や監修者となっている『ひろしまの冠婚葬祭』(神田監修 一九九二)、また『静岡県の冠婚葬祭』(静岡新聞社編 一九九四)は編集協力に加わっているなど、民俗学者が関与する場合もあるが、決して多くはない。

②葬儀と告別式の記述

基本的に「葬儀」と「告別式」は本来異なるものであるという前提で

すべて記述されている。これは、塩月八重子『冠婚葬祭入門』のように戦後の作法書が登場してから一貫してこの記述が続いている。

しかし、「葬儀」については、その記述は微妙に異なっている。地方別の作法書が登場した初期の一九八〇年代では、おもに僧侶によって編集された作法書で、「葬儀」と「葬式」という用語の使用法の違いについて検討されている。この差異を通して、葬送儀礼の持つ意味を説明し、葬儀と告別式の違いを説いているのである。この傾向はおもに僧侶を筆者とする作法書でみることができる。一九八五年刊行の『信州の仏事』(信州仏教研究会編 一九八五 一三六)では僧侶有志の執筆であるが以下のように述べている。

葬儀と告別式

葬式というのは、出棺の儀式、遺族の焼香、出棺、遺族・会葬者による野辺送り、葬場での儀式・焼香、火葬という一連の儀式を示したもので、一般会葬者が遺体とお別れの挨拶をする告別式とは、別の意味をもっていました。現在では葬儀と告別式を合わせて告別式と呼ぶことが多くなりました。

葬儀は、遺体の処理と鎮魂から成り立っています。

埋葬、または、火葬による遺体の処理はすべて終わるものではなく、遺体より離れた霊魂に対して、鎮魂の儀式が行われます。

私たちが死者に抱く愛情の念と屍体への恐怖、嫌悪感という複雑な感情が、葬儀によって釣り合いがたもたれ、また、遺族が故人に振り向ける功德によって、極楽浄土に往生ができるのです。

告別式は、文字通り故人との別れを告げる儀式であり、弔辞、弔電、焼香を中心に行われ、喪主や遺族の主だったものが、会葬者の焼香に対して答礼をします。

これを見ると「葬式」をまず自宅出棺、遺族焼香、野辺送り、葬場の儀式、焼香、火葬と一連の儀礼過程として広義に捉えており、しかも野辺送りとあることから葬列を含んだ伝統的な儀礼として理解している。そのなかで「葬儀」は「遺体処理と鎮魂」からなっていると見て、「遺体より離れた霊魂に対して、鎮魂の儀式」をするのであり、「死者に抱く愛情の念と屍体への恐怖、嫌悪感という複雑な感情が、葬儀によって釣り合いがたもたれ、また、遺族が故人に振り向ける功德によって、極楽浄土に往生」するためとしている。こうした点で「葬儀」は宗教儀礼であることをその意義と共に主張している。一方「告別式」は、「故人との別れを告げる儀式であり、弔辞、弔電、焼香を中心に行われ、喪主や遺族の主だったものが、会葬者の焼香に対して答礼」するものとして、本来、別の儀礼であることを述べ、現在は「葬儀」と「告別式」を合わせて「告別式」とよんでいるという。

葬儀の意義と告別式の意義をそれぞれ述べながら、それぞれが合体し告別式となっているとの理解であった。

そして翌年刊行された『岩手の仏事』(一九八六)では、「葬儀」の意味を上記の『信州の仏事』とは異なる意味で取っている(矢沢他編 一九八六 一一一)。

葬儀とは一般的にいえば臨終の際に僧侶にあげてもらう枕経のときから葬式の日までのことを意味し、死んだ人を葬るための宗教的な儀式のことです。

ここでは「葬儀」を「死んだ人を葬るための宗教的な儀式」ではあるが、枕経から葬式の日までのこととしており、上記の『信州の仏事』の「葬式」の定義となっている。逆に『岩手の仏事』の「葬式」が、メインの儀礼となっており、そこは逆の意味になっている。そして葬式の日

告別式が一緒に行われる状況となつて示している。

しかし、宗教者の説明も次第に葬儀当日の引導下炬式を葬儀として、またその後の焼香を告別式として、塩月八重子のような説明になつていくものもある。たとえば、『秋田の仏事』(一九八五)では、後に一般的な説明となる「葬儀」と「告別式」の区別を指し、『信州の仏事』(一九八五)のように、一連の儀礼としての葬儀としてはとらえていない(大坂 一八八五 四〇)。

葬儀当日の進行

厳密に言えば「葬儀」は遺族、近親者、縁故者が故人の冥福を祈る儀式であり、「告別式」は一般の知人が故人に別れを告げる儀式として区別されるのですが、特別な場合を除き一体化しているのが現状なので、両者を合わせて葬儀といつてもさしつかえありません。

このような説明の傾向は、新聞社発行の作法書で顕著である。つまり宗教者が執筆に関わる場合には葬儀の概念を比較的詳しく語ることが多いのに対し、新聞社の場合にはそこまではあまり踏み込まず、葬儀と告別式についてそれぞれの意義を簡単に述べ、本来は別の儀礼であったという表現であり、その記述法が浸透している。ただし、『北海道の冠婚葬祭』(一九八八)は、北海道新聞における冠婚葬祭に関する連載記事をもととしているため、「告別式と称するのではなく葬儀と称するようにな頼している」という僧侶のインタビューを掲載しているが(北海道新聞生活部編 一九八八 九六)、この記述からむしろ、一般には葬送儀礼を告別式として認識していることがうかがえるのである。

葬儀・告別式

道内では葬儀と告別式を同じ意味で使うことが多いが、浄土真宗本願寺派の札幌別院副輪番友山大信さんは「私どもでは宗教上の儀式が葬儀で、親類、知人、友人が故人とお別れするのが告別式ととらえ、新聞広告を出すときには告別式ではなく、葬儀の言葉を使うようお願いしている」という。

そして以下の『岡山の冠婚葬祭』(一九九〇)のように、新聞社による作法書の形式は、大部分が新聞記事ではなくマニュアルとして編集されており、そのなかでは葬儀と告別式が本来異なるものであるという指摘をし、それぞれの意味づけを行いつつ、一体化したものが多くと述べている(山陽新聞社編 一九九〇 一〇〇)。

仏式の葬儀とは亡くなった人の成仏を祈る儀式で、遺族や近親者、特別に親しかった友人が行うものです。これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参列します。

葬儀と告別式を分けて行う所もありますが岡山県内では葬儀と告別式は同時進行で行います。
葬儀、告別式の順序や形式は、宗派や地域ごとの風習、式場の都合などによって少しずつ異なります。

まず、仏式の葬儀について述べているが、「亡くなった人の成仏を祈る儀式で、遺族や近親者、特別に親しかった友人が行うもの」としており、告別式は「故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参列するものである。次の『栃木の冠婚葬祭』(下野新聞社 一九九二)も同様である。

亡くなった人の成仏を祈る儀式が、仏式の葬儀です。遺族や近親

者、親しかった友人などが行うものです。これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人や友人も参列します。

翌一九九一年の『栃木の冠婚葬祭』では、岡山の記述をアレンジしたと思われ、「葬儀」と「告別式」の記述はほとんど同じである。以上のように「葬儀」について、故人の成仏を祈る儀式という表現は、このほかにも、『兵庫の冠婚葬祭』（一九九二）も同様であり、『新佐賀の冠婚葬祭』（一九九二）では、「その宗派に基づき、亡くなった人を送り成仏を願う儀式」と、「その宗派に基づき」という修飾語が付くことで、仏教宗派の差異に注目しているが、内容的にはかわりない（佐賀新聞社 一九九二・一九六）。そして、翌年の『福岡の冠婚葬祭』（一九九三）も全く同じである。

ただし、『新とやまの冠婚葬祭』（一九九九）では、以下のようにかなり踏み込んだ内容となっている（北日本新聞社出版部編 一九九九 一五七）。

仏式の葬儀のほとんどは、故人を仏弟子として導き、仏の国（浄土）へ送る引導が中心となっています。ただし、浄土真宗の場合、引導の作法はなく、成仏は他力（阿弥陀如来）の導きによるとする宗旨によって、仏恩感謝の葬儀形態です。県内では、葬儀と告別式を分けて執り行うことは少ないのですが、本来告別式とは、友人知人が故人との最後の別れをするものであり、宗教儀礼とは別途の行事といえます。

これは、仏式葬儀の基本構造である「没後作僧」の内容を説明している。これは剃髪、授戒の儀礼をして仏弟子として死者を位置づけ、さらに引導下炬式によって死者を浄土に導くものである。ただし、宗派によって

それらの儀礼がないものがあり、その一例が浄土真宗系の宗派である（藤井・花山・中野 一九八〇 二二―二二）。浄土真宗の場合授戒がないため戒名ではなく法名であり、さら阿弥陀仏により極楽往生は約束されているので引導は行わず、葬儀は阿弥陀仏への信仰を深める報恩感謝の儀礼と位置づけられている。

富山を含む北陸は、真宗王国と言われるほど浄土真宗系の宗派が強い地域であり、このような葬儀式なので、葬儀の意義について内容を細かく説明しているのであるが、基本的には、従来の説明のように「故人の成仏」を祈る儀式という内容の展開である。また関連する表現として、『ぐんまの葬祭』（二〇〇〇）では、「故人をあの世に送る儀式」とし（上毛新聞社出版局編 二〇〇〇 三九）、『大阪神戸の冠婚葬祭』（二〇〇二）では、「僧侶が死者をあの世に導き、遺族・近親者など親しかった人々が成仏を祈るために行う儀式」として（サンケイリビング新聞社編 二〇〇二 一一五）、来世について記述を付加しているものもある。

ところが、成仏という用語を用いず『名古屋版おつきあい講座』（一九九五）では、「葬儀は死者を弔う儀式」とあり（竹内 一九九五 九二）、一九九六『いばらきの冠婚葬祭』（一九九六）では、「故人を弔う儀式のことで、読経・引導渡し、焼香、出棺、火葬などが行われます」とやや広義の内容になっている（瀬谷地監修 一九九六 一四六）。

さらに『広島冠婚葬祭』（一九九二）では、「葬儀は深い縁で結ばれた人との、人生最後の別れであるとともに、故人の死を悼み、弔うための仏事」とあり（神田監修 一九九二 九六）、死者との別れと追悼に強調したうえで、弔う儀式とあっており、「故人を弔うこと」が葬儀の説明となっている。ただ「弔う」は「とぶらう」の変化した言葉であり、死を悼んで服喪の人を弔問する意味もある。つまり、冥福を祈るという意味をもちつつも、残された生者との関係も強い。さらに、『徳島の冠婚葬祭』（一九九五）では、「葬儀は死者を葬る儀式」とあり（徳島新聞

社 一九九五 一二六)、埋葬の意味が強化されている。

こうして葬儀に関しては様々な記述があり、死者を成仏させるという意味から、あの世に送るなど、死者の靈魂の処遇という文化的変換が強調されたり、弔うという社会的変換が強調されたりするが、『新・熊本の冠婚葬祭』(一九九六)では、以下のようにほとんど告別式と意味が異なるものもある〔熊本日々新聞情報文化センター編 一九九六 一三六〕。

葬儀と告別式は本来それぞれ違った意味を持つ儀式です。葬儀は近親者や親しい友人・知人によって営まれ、故人と別れを告げる。これに対し、告別式は文字通り最後のお別れを告げるもので、生前に付き合ひのあった人たちが故人をお見送りします。

ここでは、「葬儀」と「告別式」の儀礼の意義は双方とも故人との別れであり、ただ別れを行う主体が異なっているだけである。このように葬儀自体も次第に、従来の宗教性があまり重視されなくなり、告別式同様、別れが強調されている場合もあったのである。

⑤ 告別式とその位置づけ

「葬儀」については、それぞれ微妙に意味が異なる表現がなされていることが明らかにしたが、それに対し告別式については文字通りシンブル表現になっている。意味の異なるものはあまりなく、ほとんど定型であり「故人と別れを告げる」という文言になっている。

告別式というのは、故人に縁の深かった人々が、故人に最後の別れを告げるために設けられた式で、性格は全く別なのです。しかし

近年では、葬式の日と告別式も一緒に営まれるようになってきております。

盛岡地方での一般的な葬式
①会葬者の入場②遺族の入場③僧侶の入場④開式の辞⑤僧侶の読経⑥弔辞の披露⑦弔電の披露⑧僧侶の読経⑨遺族の焼香⑩謝辞⑪会葬者の焼香⑫閉式の辞

これは『岩手の仏事』(一九八六)であるが、結局本来は異なるものも、近年は葬式の日と一緒に営まれるようになったという〔矢沢他編 一九八六 二二二〕。このような表現は新聞社として早い段階で作法書を刊行した山陽新聞社でも、同様の説明をしている〔山陽新聞社編 一九九〇 一〇〇〕。

これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参列します。葬儀と告別式を分けて行う所もあるようですが岡山県内では葬儀と告別式は同時進行で行います。葬儀、告別式の順序や形式は、宗派や地域ごとの風習、式場の都合などによって少しずつ異なります。

ここでも告別式は最後の別れを告げる儀式であり、「岡山県内では葬儀と告別式は同時進行で行います」とあり、葬儀と連続していることがわかる。このように告別式は別れを告げる儀式との表現は告別式に言及しているすべての作法書にあり、同義であることがわかる。

そして葬儀と告別式が一体化、連続しているとの記述は多少の表現の違いはあるものの刊行順でみると、『秋田の仏事』(一九八五)、『信州の仏事』(一九八五)、『京都・宇治・城陽地方の儀式作法入門』(一九八六)、『青森県葬儀あれこれ』(一九八六)、『岩手の仏事』(一九八六)、『岡山の

冠婚葬祭』(一九九〇)、『栃木の冠婚葬祭』(一九九一)、『新佐賀の冠婚葬祭』(一九九二)、『兵庫の冠婚葬祭』(一九九二)、『広島島の冠婚葬祭』(一九九二)、『福岡の冠婚葬祭』(一九九三)、『静岡の冠婚葬祭』(一九九四)、『名古屋版おつきあい講座』(一九九五)、『徳島の冠婚葬祭』(一九九五)、『いばらきの冠婚葬祭』(一九九六)、『新・熊本冠婚葬祭』(一九九六)、『愛媛の冠婚葬祭』(一九九七)、『富山の冠婚葬祭』(一九九七)、『ぐんまの葬祭』(二〇〇〇)、『大阪神戸の冠婚葬祭』(二〇〇二)、『福島の冠婚葬祭』(二〇〇九)、『新潟の葬儀と法要』(二〇一〇)など、ほぼすべてが、葬儀と告別式が一体化して連続していると述べている。

そのなかで、『ぐんまの葬祭』では、これが一体化している要因について〔上毛新聞社出版局編 二〇〇〇 三九〕

現在「葬儀・告別式」という言い方が一般的で、葬儀と告別式が同時進行で行われますが、かつては葬儀と告別式は機能も違い、別々に行われたものでした。ところが、葬儀を行った後に告別式を行っていたのは、時間がかかりすぎることから、葬儀の途中から焼香などの会葬を受け付け、あわせて1時間程度の儀式にしようという風潮が生まれ、「葬儀・告別式」という形式が生まれたのです。

ここでは、一体化する要因について、本来は別個に行っていた葬儀と告別式が、時間がかかりすぎると言うことから一体化したものと述べている。塩月弥栄子『冠婚葬祭入門』などでの方式を正式としつつ、それが一体化したのは時間の効率化であると理解しているのであった。

以上のように、地方別の作法書からみても、告別式に関してはほぼ均質的に捉えられているだけでなく、それが全国的に行われ、しかも葬儀と一体化して、葬儀・告別式と葬送儀礼の重要な構成要素となっていることがわかる。

おわりに

告別式は、それが成立した一九〇一(明治三四)年の中江兆民の場合、その宗教的な信念から、無宗教式による従来の葬儀式の代替であった。しかし、次第に告別式が行われるようになると、当初の意図である宗教性の排除は次第になされなくなり、従来の葬儀の代替として、焼香や玉串奉奠などの会葬の部分をその構成要素として、宗教儀礼を含んだものを総体的に告別式と称するようになり、時には洗練された形として認識され、新たな様式として浸透していった。

当初は都会地に流行する新たな葬儀形態として認識されており、随意焼香の部分を告別式と称する場合もあり、その認識は必ずしも一致したものではなかった。戦時下においても告別式は普及して行き、戦後になると、従来の宗教儀礼部分を「葬儀」と称し、随意焼香部分を「告別式」として分離して理解されるようになる。

そして都府県別の作法書が一九八〇年代以降登場すると、告別式の記述は、葬儀と告別式は本来異なるものであるという表現が目立ち、同一の定型的な文言であった。さらに東京の方式を正統な方式とし、現地では一体化したものが実施されていると、地方差として認識されるようになり、結果としてほぼ全国的に均質化した状況が呈されるようになる。

つまり、告別式と葬儀は一体化し、その構成要素として位置づけられるようになっていった。告別式が成立する以前も葬儀の中に会葬者の焼香が含まれていたが、それは告別式として、地方では受容されていったことがわかる。

つまり東京で成立した告別式は地方に浸透し、従来の葬儀式の理解のあり方を、作法書という支配的言説によって一定の形に収斂化していったことが明らかになった。

註

- (1) 当初、葬列が行われていた時代の延長によって、告別式と引導式部分のみを寺院や青山、谷中などの専門葬儀場で行っていた。この場合には、通夜などはまだ自宅であるが、次第に通夜、引導式、告別式など一連の儀礼が行われていくことを指摘したい。
- (2) 「斎場」という場合、火葬場を指す場合と葬儀式場を指す場合があるため、本稿では葬儀式場の意味で使用する、葬儀を目的とした施設として、本稿では専門葬儀場と称する。
- (3) 初版本は国立国会図書館所蔵である。改訂第八版の確認ができていないため、告別式の記載がいつの段階で加わったかは断定はできないが、一九三二（昭和六）年の第九版の可能性が高い。これは第七版まで順調に版を重ねていたが、関東大震災による版型の滅失によって、改訂第八版がでるがこれは復刻であり内容的な変化はないと考えられ、一九三一（昭和六）年の九版が増補版となっていることから、告別式の記述は一九三一年に加わったものと考えられる。
- (4) 産経ニュース「あの家にはお茶がある」(<http://www.sankei.com/life/news/150318/1503180012-n2.html>) 2016.1.24 閲覧

参考文献

井上 章一 一九八四 『靈柩車の誕生』 朝日新聞社
 木下 光生 二〇一〇 『近世三昧聖と葬送文化』 塙書房
 幸徳 秋水 一九〇二 『兆民先生』 博文館
 国民礼儀普及会編 一九四〇 『現代礼儀作法全書』 帝国女子教育会
 塩月弥栄子 一九七〇 『冠婚葬祭入門』 光文社
 塩月弥栄子 一九七二 『冠婚葬祭』 光文社
 主婦の友社編 一九四〇 『家庭作法宝典』 主婦の友社
 須賀 隆賢 一九三一 『引導下炬集』 増補九版 三寶社
 千登三子監修 一九八〇 『冠婚葬祭』 ②葬儀と供養、保育社
 中江 兆民 一九八三（一九〇二）『統一年有半』 『中江兆民全集』 一〇巻
 野口 勝一 一九九八 『葬儀の弊風を改むへし』 『風俗画報』 一七二号
 平出鏗二郎 一九七二（一九〇一）『東京風俗志』 新装版、明治百年史叢書、原書房
 藤井 正雄・花山勝友・中野東禪 一九八〇 『仏教葬祭大事典』 雄山閣
 甫守 謹吾 一九二七 『現代の作法』 南光社
 森 謙二 一九九三 『墓と葬送の社会史』 講談社

村上 興匡 一九九〇 「大正期東京における葬送儀礼の変化と近代化」 『宗教研究』 六四（一）
 村上 興匡 二〇〇一 「中江兆民の死と葬儀：最初の「告別式」と生の最終表現としての葬儀」 『東京大学宗教学年報』 一九
 山田 慎也 二〇〇四 「葬儀を意味づけるもの」 『仏教再生への道すじ』 藤井正雄編、勉誠出版
 山田 慎也 二〇〇七 「現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生観の変容」 東京大学出版会
 山田 慎也 二〇〇八 「過程としての葬儀とその効率化」 『死の儀法―在宅死に見る葬の礼節・死生観』 近藤功行・小松和彦編著、ミネルヴァ書房
 山田 慎也 二〇一三 「葬儀の変化と死のイメージ」 『近代化のなかの誕生と死』 国立歴史民俗博物館・山田慎也編、岩田書院
 山田 慎也 二〇一五 「明誉真月大姉葬儀写真帖」 からみた近代の葬列の肥大化』 『国立歴史民俗博物館研究報告』 一九九集
 山村 浩編 一九九二 『都道府県別冠婚葬祭大事典』 総監修大島建彦、主婦と生活社

（国立歴史民俗博物館研究部）
 二〇一六年三月一八日受付、二〇一六年一〇月一七日審査終了

表1 都道府県別作法書

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
北海道 『北海道の冠婚葬祭』 北海道新聞社生活部編 北海道新聞社	1988	葬儀・告別式 道内では葬儀と告別式を同じ意味で使うことが多いが、浄土真宗本願寺派の札幌別院副輪番友山大信さんは「私どもでは宗教上の儀式が葬儀で、親類、知人、友人が故人とお別れするのが告別式ととらえ、新聞広告を出すときには告別式ではなく、葬儀の言葉を使うようお願いしている」という。 東京では「葬儀 午後一時、告別式 同二時」と分ける場合も多い。さらに細かい手順は道内でも焼香よりも弔辞、弔電拝読が先だったり、後回しになった弔電拝読の時にはすでに僧りよが退席したり、いろいろ。 言葉遣いも進め方も宗派や地域によって違いがあるようだ。(P.96)	新聞の連載を単著化
青森県 『青森県葬儀あれこれ』 青森県仏教会・青森県神社庁・日本キリスト教団・本町カトリック教会監修 東奥日報社	1986	本来は告別式と葬式は別 ただ本県と東京周辺の葬式を比べますと、本県では告別式を含めて葬式として営んでいますが、東京などでは本来の葬式は身内だけで行い、別に時間を区切って告別式を設け、一般会葬者は時間に制約されずに都合のよい時間に向向いて香典を上げ焼香し故人と最後の別れをすることで大きな違いがあります。本県でも寺によっては本来の葬式と告別式を区別する意味で一般会葬者焼香前に読経を終えて退堂する導師も見受けられます。これは手抜きをしているのではなく、住職の考えによるものなのです。(P.75)	本文は記者・上記コラムは僧侶など
秋田県 『秋田の仏事』 大坂高昭 無明舎出版	1985	葬儀当日の進行 厳密に言えば「葬儀」は遺族、近親者、縁故者が故人の冥福を祈る儀式であり、「告別式」は一般の知人が故人に別れを告げる儀式として区別されるものですが、特別な場合を除き一体化しているのが現状なので、両者を合わせて葬儀といってもさしつかえありません。 葬儀の式次第 ①参列者入場着席、②寺院入場着席、③開式のことば(司会者)、④読経、⑤弔辞拝受、⑥弔電代読、⑦読経、⑧焼香(読経中に遺族は祭壇前、一般は定められた焼香台、または「回し焼香」で行います)、⑨喪主挨拶(遺族代表挨拶)、閉式のことば(司会者)、⑩寺院退場(P.40-43)	僧侶による執筆
岩手県 『岩手の仏事』 矢沢亮祐他編 岩手日報社	1986	葬儀と告別式 葬儀とは一般的に言えば臨終の際に僧侶にあげてもらった枕経のときから葬式の日までのことを意味し、死んだ人を葬るための宗教的な儀式のことです。それに対して、告別式というのは、故人に縁の深かった人々が、故人に最後の別れを告げるために設けられた式で、性格は全く別なのです。しかし近年では、葬式の日には告別式も一緒に営まれるようになってきております。 たとえば、盛岡地方で営まれている一般的な葬式は ①会葬者の入場②遺族の入場③僧侶の入場④開式の辞⑤僧侶の読経⑥弔辞の披露⑦弔電の披露⑧僧侶の読経⑨遺族の焼香⑩謝辞⑪会葬者の焼香⑫閉式の辞(P.121)	編集委員10名はすべて僧侶
福島県 『ふくしまの冠婚葬祭』 ふくしまの冠婚葬祭編集部編 エス・シー・シー	2009	葬儀は、親族や関係者によって故人を弔う宗教的儀式。一般的には僧侶が読経を行い故人の成仏を祈ります。告別式は故人の友人や知人が焼香してお別れをする社会的儀式です。ですから、葬儀が終わったら僧侶はいったん退場するのが正式ですが、最近はそのまま引き続き告別式が行われるのが一般的になってきました。(P.73)	情報誌刊行会社

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
群馬県 『ぐんまの葬祭―旅立ちかた旅立たせかた』 上毛新聞社出版局編 上毛新聞社	2000	<p>葬儀は故人をあの世に送る宗教儀礼であり、出棺の儀式、出棺、火葬、葬儀場での儀式・焼香という一連の儀式をいいます。告別式は、文字通り故人に別れを告げる儀式で、弔辞、弔電、焼香などが行われます。現在「葬儀・告別式」という言い方が一般的で、葬儀と告別式が同時進行で行われますが、かつては葬儀と告別式は機能も違い、別々に行われたものでした。ところが、葬儀を行った後に告別式を行ってはいは、時間がかかりすぎるということから、葬儀の途中から焼香などの会葬を受け付け、あわせて1時間程度の儀式にしようという風潮が生まれ、「葬儀・告別式」という形式が生まれたのです。</p> <p>葬儀・告別式次第 導師入場・開式・読経・弔電・弔辞・親族代表挨拶・親族焼香・指名焼香・一般焼香・閉式 そのあとに初七日の儀練り上げ法要があげられている。(PP.39-40)</p>	新聞社 一部民俗学者
栃木県 『栃木の冠婚葬祭』 下野新聞社編 下野新聞社	1991	<p>亡くなった人の成仏を祈る儀式が、仏式の葬儀です。遺族や近親者、親しかった友人などが行うものです。これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人や友人も参列します。</p> <p>葬儀と告別式は一緒に行うところと別々に行うところがあります。葬儀、告別式の順序や形式は宗派や地域によって少しずつ異なります。</p> <p>焼香について 葬儀のときの焼香は、まず僧侶が行います。そして読経の中、司会者が僧侶の合図で喪主、遺族、友人、知人の順で行います。この頃は司会者の一連の進行で葬儀と告別式の区別がしにくくなっていますが、本来は別個のもので、遺族、親族、友人が故人のために祈り、焼香するのが葬儀で、一般の知人が別れの焼香をするのが告別式です。</p> <p>したがって遺族は告別式では焼香をしません。会葬者が焼香するとき、一人ひとりに目礼します。</p> <p>告別式の進め方 告別式は故人に最後の別れを告げる儀式です。正式には僧侶入場からはじまりますが、最近では僧侶が葬儀の席から退場せず、そのまま移行することが多くなりました。読経に続いて、一般会葬者焼香となりますが、会葬者が多い場合には、香炉の数を増やし、なるべく待たせないように配慮します。続いて僧侶退場、親族代表挨拶があり、最後に司会者が閉会の言葉を述べます。(PP.97-98)</p>	新聞社
茨城県 『いばらきの冠婚葬祭』 瀬谷義彦・斎藤平・佐藤次男監修 茨城放送	1996	<p>仏式の葬儀 葬儀は、遺族や近親者が故人を弔う儀式のことで、読経・引導渡し、焼香、出棺、火葬などが行われます。一方、告別式は、故人の友人、知人らが故人とお別れをするための儀式で、弔辞や弔電を読み上げ、弔問客の焼香が行われます。本来は別々に営まれていましたが、現在では、この二つを同時に行うケースも増えています。</p> <p>葬儀・告別式の式次第 ①受付②着席③僧侶入場④開会の辞⑤読経・引導渡し⑥弔辞⑦遺族の焼香⑧一般参列者の焼香⑨弔電⑩僧侶退場⑪喪主または親族代表の挨拶⑫閉会の辞 (P.146)</p>	研究者・新聞記者
静岡県 『静岡県の冠婚葬祭』 静岡新聞社編 静岡新聞社	1994	<p>葬儀 葬儀と告別式を分けて行うときは、葬儀が済むと、僧侶はいったん控室に引き上げ、その後再び告別式のために入場し、告別式の読経を始めます。</p> <p>葬儀・告別式とひとくりにされるか、葬儀のみのときは一般会葬者が見守る中で葬儀から、ただちに告別式に移ります。</p> <p>①喪主・遺族・会葬者着席②僧侶入場③開会の辞④読経・引導⑤弔辞の朗読⑥弔電の奉読⑦読経⑧喪主・遺族焼香⑨一般会葬者焼香⑩僧侶退場⑪喪主挨拶⑫閉会の辞 (PP.173-174)</p>	新聞社

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
新潟県 『改訂版新潟の葬儀と法要』 横山博之・野村尚志 新潟日報事業社	2010	葬儀と告別式の違いとは 現在では葬儀と告別式をともに行う場合が多くなりました。しかし葬儀と告別式は本来、別々の意味をもっているのです。葬儀は遺族や近親者が故人をあの世へ送り、成仏を祈る儀式であるのに対し、告別式は故人と親交のあった人が、最後の別れを告げる儀式とされています。正式には、別々に行うことがしきたりとされていました。 葬儀の進行 遺族と会葬者入場・着席→僧侶入堂（入場）→開式の辞→読経・引導→弔辞の拝受・弔電の紹介→読経・焼香→閉式の辞（僧侶の退堂） 告別式の進行 僧侶入堂→読経・会葬者焼香→僧侶退堂→喪主あいさつ→閉式の辞 略式の葬儀・告別式の進行例 遺族と会葬者入場・着席→僧侶入堂→読経・引導→弔辞拝受・弔電朗読→遺族・近親者焼香（読経中）→会葬者焼香（読経中）→僧侶退堂→閉式の辞（PP.68-71）	新聞社
長野県 『信州の仏事』 信州仏教研究会編 銀河書房	1985	葬儀と告別式 葬式というのは、出棺の儀式、遺族の焼香、出棺、遺族・会葬者による野辺送り、葬場での儀式・焼香、火葬という一連の儀式を示したもので、一般会葬者が遺体とお別れの挨拶をする告別式とは、別の意味をもっていますが、現在では葬儀と告別式を合わせて告別式と呼ぶことが多くなりました。 葬儀は、遺体の処理と鎮魂から成り立っています。 埋葬、または、火葬による遺体の処理はすべて終わるものではなく、遺体より離れた霊魂に対して、鎮魂の儀式が行われます。 私たちが死者に抱く愛情の念と屍体への恐怖、嫌悪感という複雑な感情が、葬儀によって釣り合いがたまたれ、また、遺族が故人に振り向ける功德によって、極楽浄土に往生ができるのです。 告別式は、文字通り故人との別れを告げる儀式であり、弔辞、弔電、焼香を中心に行われ、喪主や遺族の主だったものが、会葬者の焼香に対して答礼をします。（P.136）	僧侶による執筆
富山県 『新とやまの冠婚葬祭』 北日本新聞社出版部編 北日本新聞社	1999	葬儀・告別式 仏式の葬儀のほとんどは、故人を仏弟子として導き、仏の国（浄土）へ送る引導が中心となっています。ただし、浄土真宗の場合、引導の作法はなく、成仏は他力（阿弥陀如来）の導きによるとする宗旨によって、仏恩感謝の葬儀形態です。 県内では、葬儀と告別式を分けて執り行うことは少ないのですが、本来告別式とは、友人知人が故人との最後の別れをするものであり、宗教儀礼とは別途の行事といえます。 葬儀の進行 僧侶の入場→開式の辞→読経→弔辞拝受・弔電紹介→焼香→閉式のあいさつ→閉会の辞→僧侶退場（告別式 読経→一般焼香→僧侶退場→閉式の辞）（P.157）	新聞社 互助会の全面協力
石川県 『北陸の冠婚葬祭』 北国新聞社編集局編 北国新聞社	1990	告別式に関する記述なし	新聞記事の連載
愛知県 『名古屋版おつきあい講座』 竹内くに子 中日新聞本社	1995	葬儀・告別式 葬儀は死者を弔う儀式、告別式は死者との別れの儀式です。最近では葬儀と告別式を区別せず、葬儀に引き続き告別式が行われるのが一般的となりました。（中略）順序として読経、弔辞の朗読、弔電披露、導師焼香、この後喪主、遺族、近親者の焼香が行われます。（中略）続いて告別式になり、一般会葬者が焼香を行います。遺族は答礼します。（P.92）	松坂屋暮らしのアドバイザー 25年 県消費生活センター、名古屋通産局の消費生活相談員

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
京都府 『京都・宇治・城陽地方 の儀式作法入門』 岩上力 光琳社出版	1986	葬儀と告別式 通常、葬儀、告別式を、お葬式とひと口で言い、自宅葬では、ほとんど、この両方を同時に行いますので、混同されがちでございますが、本来、葬儀と告別式は別のものでございます。葬儀は、故人の成仏を念じる弔いの儀式であり、遺族や近親者、また、特に故人と親しかった友人や知人で行われるもので、告別式は、故人に最後のお別れを告げる儀式でございます。一般の会葬者は、この告別式に参列することになります。(P.126)	結納店役員・儀式作法研究会代表
大阪府・兵庫県 『大阪神戸の冠婚葬祭』 サンケイリビング新聞社 編 サンケイリビング新聞社	2002	僧侶が主として行うのが葬儀その後が告別式 なお、葬儀と告別式は意味が違います。僧侶が死者をあの世に導き、遺族・近親者など親しかった人々が成仏を祈るために行う儀式が葬儀。葬儀後に行われる告別式は、一般の知人・友人らが故人と別れを行うものです。しかし最近の傾向としては同じものとしてとらえられている人が多く、実際、別々に行われるケースは少ないようです。 仏式の個人葬儀スケジュール（遺体のままでの葬儀の例） 受付関係者集合→受付開始→導師到着→遺族・親族着席→導師着席→開式の辞→読経→導師焼香→弔辞拝受→弔電披露→焼香→導師退席→閉式の辞→お別れ・献花→喪主、親族代表挨拶→出棺→火葬場へ→火葬→収骨→精進落とし (PP.115-116)	新聞社監修・作法指導は新日本作法会・日本こども作法会会長/作法研究家前田ますみ
兵庫県 『兵庫の冠婚葬祭』 神戸新聞総合出版センター編 神戸新聞総合出版センター	1992	仏式葬儀－葬儀・告別式 葬儀、告別式の順序、形式は地域や宗派の違いなどによって異なります。「葬儀」は故人の成仏を祈るセレモニーであり、本来は遺族、近親者、親しい人だけで行われるものです。「告別式」は、故人に最後の別れを告げるためのもので、一般会葬者はこの告別式で焼香することになります。しかし、最近では、その葬儀と告別式を分けずに行うことが多くなりました。そして、喪主から一般会葬者までの焼香がすめば式が終わりとなります。 葬儀の進行 ①喪主、遺族の入場・着席、②僧侶入場・着席、③開式の辞、④読経、⑤弔辞・弔電披露、⑥焼香、⑦閉式の辞 告別式の進行 ①告別式の開始 葬儀に引き続いておこなわれる。僧侶の読経の中、一般会葬者の焼香が行われます。②僧侶退場、③閉式の辞 (PP.157-158)	新聞社
岡山県 『岡山の冠婚葬祭』 山陽新聞社編 山陽新聞社	1990	葬儀・告別式 仏式の葬儀とは亡くなった人の成仏を祈る儀式で、遺族や近親者、特別に親しかった友人が行うものです。これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参列します。 葬儀と告別式を分けて行う所もあるようですが岡山県内では葬儀と告別式は同時進行で行います。 葬儀、告別式の順序や形式は、宗派や地域ごとの風習、式場の都合などによって少しずつ異なります。(P.100)	新聞社
島根県 『島根の冠婚葬祭』 白石昭臣・酒井薫美 ワン・ライン	2000	葬儀と告別式 仏式の葬儀は、亡くなった人の成仏を祈る儀式で、遺族や近親者、それに特別親しかった友人が行うものです。また、告別式は個人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参加します。最近では会場を寺や葬祭会館などにして、葬儀兼告別式の形が圧倒的に多いようです。 葬儀・告別式次第 宗派によって多少の違いはありますが、現在、最も多い寺での葬儀について、だいたいのところを述べておきます。開式の案内、導師・僧侶入場、開式の辞、僧侶読経、弔辞、弔電披露、読経・焼香、導師・僧侶退場、喪主挨拶、閉式の辞、一般会葬者見送りといったところでしょうか。(PP.75-77)	民俗学者による新聞連載を著書化

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
広島県 『ひろしまの冠婚葬祭』 神田三亀男監修 中国新聞社	1992	仏式葬儀 葬儀・告別式 葬儀と告別式は本来違う意味を持つ儀式です。葬儀は深い縁で結ばれた人との、人生最後の別れであるとともに、故人の死を悼み、弔うための仏事で、遺族、近親者、友人などによって営まれます。一方、告別式は一般会葬者が故人に別れを告げる儀式です。したがって、葬儀と告別式を分けて行うのが正式ですが、現在、広島県ではほとんどが一緒にとり行われています。 一般的な式次第 親族・参列者着席、導師・僧侶の入場、開式の辞、読経（導師焼香）、弔辞朗読、弔電披露、読経、遺族焼香、一般会葬者焼香、導師・僧侶の退場、遺族代表あいさつ、閉会の辞（P.96）	新聞社 監修は民俗学者
徳島県 『徳島の冠婚葬祭』 徳島新聞社	1995	最近、葬儀と告別式が同日に行われるのが一般的です。葬儀＝告別式と考えがちですが、葬儀は死者を葬る儀式で、告別式は友人、知人がいとまごいをする事です。葬儀、告別式の進行は葬儀委員長を中心に細かい打ち合わせをして行います。 仏式葬儀 ①遺族、会葬者着席②僧りょ入堂③開式の辞④読経⑤弔辞・弔電の披露⑥僧りょ焼香⑦読経⑧遺族近親者焼香（読経中）⑨僧りょ退堂⑩閉式の辞 仏式告別式 ①僧りょ入堂②開式の辞③読経④会葬者焼香（読経中）⑤僧りょ退堂⑥閉式の辞（P.126）	新聞社
愛媛県 『愛媛の冠婚葬祭』 えひめリビング新聞社編 えひめリビング新聞社	1997	仏式葬儀スケジュール 葬儀と告別式は本来異なっていたもので、葬儀の後に行われのが告別式です。しかし愛媛県内では葬儀と告別式が同時に進行しているのが通例のようです。（P.121）	新聞社
福岡県 『福岡県の冠婚葬祭』 西日本新聞社	1993	仏式の葬儀は、亡くなった人の成仏を祈る儀式で、遺族や近親者、特別に親しかった友人が行うものです。これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、一般の知人も参列します。 大規模な葬式では、葬儀と告別式がはっきりと分かれますが、県内ではまだ少なく、ほとんどは「葬儀および告別式」と、ひき続きになっています。場所は自宅と斎場がほぼ半々です。 葬儀、告別式の順序や形式は、宗派や地域ごとの風習、式場の都合などによって少しずつ異なります。基本的には寺院や葬儀社に任せます。（P.110）	新聞社
佐賀県 『さかの冠婚葬祭』	1981	キリスト教においてのみ告別式の記述有り。	民俗学者の連載
佐賀県 『新佐賀の冠婚葬祭』 佐賀新聞社	1992	葬儀と告別式 仏式の葬儀は、その宗派に基づき、亡くなった人を送り成仏を願う儀式で、遺族や近親者、特別に親しかった友人などで行います。 これに対し告別式は、故人に最後の別れを告げる儀式で、生前に関わりのあった知人も参加します。 このように葬儀と告別式は本来、別のものですが、大規模な葬儀の場合を除き、多くは同じ会場で続けて行われます。しかし自宅で普通に行う場合は葬儀だけが行われるようです。葬儀・告別式の順序や形式は、宗派や地域ごとの風習、式場の都合、人数などによって少しずつ異なりますが、基本的なところは大きく変わりません。現在は、火葬場の都合などで出棺後の葬儀が多いようです。 葬儀の進行 ①遺族、近親者の入場②参列者の入場③僧侶入場④開会の辞⑤読経⑥喪主・葬儀委員長の焼香⑦弔辞・弔電披露⑧焼香⑨僧侶退場・閉式の辞 告別式の進め方 ①一般会葬者の焼香②僧侶退場③司会者による閉式の言葉（PP.96-98）	新聞社 葬の監修は僧侶

書名	刊行年	告別式に関する記述内容	著者の性格
大分県 『豊の国 お葬式のマナー』改訂版 金澤知正編 中央葬儀、私家版	1992	第三章 葬儀に参列する 東京、大阪、京都などの大都市では、葬儀は近親者だけで行い、告別式に入って初めて、会葬者の弔意（お焼香）を受けるという式の進行が多く見られます。この場合、会葬者は、告別式の時間に参列して焼香するだけですから、15分もあればお参りできるわけです。 このように葬儀は近親者だけですませて、引き続き行われる告別式で会葬者の弔意を受けるのが、大都市ではごくあたりまえの進行です。しかし、大分県では、葬儀と告別式とが、あわせてとり行われています。すべての会葬者は葬儀開始時間から参列するのが普通です。 仏式は御僧侶入場—開式の辞—読経（10分から20分）—弔辞・弔電—読経—遺族・親族の焼香—代表者の焼香—一般会葬者の焼香告別式—御僧侶退席—遺族挨拶（場合によっては告別式）—閉式の辞となります。宗派や会葬者の人数によっても違いますが、30分から1時間ほどで閉式となります。 会葬者の焼香は、告別式になってから案内されるのが本来ですが、大分市では遺族の焼香と同時に会葬者の焼香が始まる場合があります。（PP.11-12）	葬祭業者
熊本県 『新・熊本の冠婚葬祭』 熊本日日新聞情報文化センター編 熊本日日新聞社	1996	葬儀と告別式の違い 最近では同時並行の傾向 葬儀と告別式は本来それぞれ違った意味を持つ儀式です。葬儀は近親者や親しい友人・知人によって営まれ、故人と別れを告げる。これに対し、告別式は文字通り最後のお別れを告げるもので、生前に付き合いのあった人たちが故人をお見送ります。ただし、現在は葬儀と同時並行して行われるのが一般的です。（PP.136-137）	新聞社
沖縄県 『沖縄冠婚葬祭の手引』 那覇出版社編集部編 那覇出版社	1982	自宅での告別式 葬儀・告別式を寺や葬儀場で行なうばあいもありますが、自宅 <small>(ママ)</small> で取り行なうばあいも多くあります。自宅で行なうばあいも、葬儀の基本的な順序はかわりはありません。ただ、自宅で行なう時は、会葬者に便利のように式場をしつらえることが大事です。 寺での告別式 お寺で告別式をするばあい、式場の飾りつけやお花・供物などはお寺の方でとりしきってくれます。ですから、遺族の方は、遺骨、遺影を抱き、式の時間にあわせてお寺に向かうようにします（だいたい三十分から一時間前がいい）。 寺での告別式の順序 一、開式の辞、二、読経、三、遺族焼香、四、弔辞、五、弔電の披露、六、一般会葬者の焼香、七、遺族による謝辞、八、閉式の辞（PP.91-92）	出版社

Standardization of Farewell Ceremonies for the Deceased and the Books of Funeral Etiquette

YAMADA Shin'ya

This paper presents a study of the standardization of folk rituals and their explanations. To be more specific, this paper analyzes how a farewell ceremony has been established as a central ritual in funeral rites and spread into the regions since the modern times by examining the books of funeral etiquette and other relevant documents. In the modern times, the funeral service consisted of a series of rituals, including making a funeral procession and holding rituals at home, the temple, and the cemetery, respectively. However, while the development of cities made it increasingly difficult to form a funeral procession, people were getting weary of it. In this context, the farewell ceremony emerged. Although it was offered as an alternative option for a funeral ceremony, later it cast off the religious rituals of funeral ceremonies (e.g. incense burning), as Chōmin Nakae, to whom the farewell ceremony was attributed, denied its religious implications. At that time, the farewell and funeral ceremonies were in principle separated, but according to a book of funeral etiquette in the Shōwa period, this was considered as a new style and interpreted in various ways.

After the Second World War, this separate style became accepted as a standard form, but an increasing number of people preferred to the integrated style. Later, the farewell ceremony including funeral rituals was defined as a central ritual. In the 1980s, books of funeral etiquette were compiled for individual prefectures. These books presented a similar description of farewell ceremonies and suggested the one prevailing in Tokyo as an orthodox style. While the integrated style was gaining increasing popularity there, people started to notice regional differences. In the end, a common style became predominant across the nation. Thus, it has been revealed that although there were some variations depending on the region, the books of funeral etiquette integrated different ritual styles into a single form.

Key words: Farewell ceremony, a book of funeral etiquette, modernization, funeral, ritual